

## 元気あおもり応援隊会議（福岡圏）

日時：平成30年1月11日（木）  
18時～20時30分  
会場：西鉄グランドホテル  
「真 珠」（第1部）  
「クレイオ」（第2部）

「元気あおもり応援隊会議」（福岡圏）を平成30年1月11日（木）午後6時から西鉄グランドホテル（福岡県福岡市）で開催しました。

当日は、8名の応援隊の方々が参加し、会議では「人幸増加大作戦（「経済を回す）ための取組について」をテーマに意見交換を行いました。

その概要は、次のとおりです。

.....

### 【開催挨拶】

（青森県知事 三村申吾）

皆様、明けましておめでとうございます。

本日は、大変お忙しい中、「元気あおもり応援隊会議」にご出席いただき、誠にありがとうございます。皆様には、それぞれのお立場から、様々な場面で「あおもりの元気づくり」にご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

昨年は、国際定期便の青森・天津線が就航したほか、青森・ソウル線の増便、台湾定期チャーター便の就航と、国際航空路線が充実しました。また、北海道・東北新幹線、フェリーなどの海上交通、国内外の主要都市を結ぶ航空路線といった「陸・海・空」の交通ネットワークを組み合わせた「立体観光」を強力に推進した結果、国内外から多くの観光客にお越しいただきました。特に、昨年の外国人延べ宿泊者数は、10月までで既に過去最多の19万4千人に達し、東北トップとなっています。

全国に先駆けて取り組んできた「攻めの農林水産業」についても、大きな成果が見られました。平成28年の農業産出額は19年ぶりとなった前年に続いて、2年連続で3千億円を突破し、13年連続で東北トップを堅持するとともに、全国順位は過去最高となった昨年と同じく7位となりました。ホタテの生産額は2年連続で2百億円を確保し、リンゴの販売額は3年連続で1千億円の大台を突破するなど、いずれも好調に推移しました。

また、本県期待の特A米「青天の霹靂」はデビュー3年目を迎えました。銘柄米の産地間競争が激化する中、29年産米は、「こんにちは、さっぱり」をキーワードに、食味にこだわったPR活動を全国で強力に展開しています。今後も、ブランド化に向けて積極的な取組を進めて参りますので、皆様のご支援とご協



力をよろしくお願ひいたします。

さて、我が国が本格的な人口減少社会を迎え、本県においても少子高齢化が進行している中、青森県が人口減少社会を乗り越え、さらなる成長を続けていくためには、何よりも県民の経済的基盤の確立が重要となります。このため特に、青森県が持つ資源を県外や海外へ積極的に売り込み、本県に「経済を集め」、そして地域で「経済を回していく」ための施策を知事就任以来、重点的に進めており、近年、様々な分野で取組の成果が着実に現れてきています。

現在、青森県では、「人幸増加大作戦」のキャッチフレーズのもと、人口減少克服に向けた様々な取組を展開していますが、本日は特に、「経済を回していく」県の取組をご説明させていただきます。

皆様には、忌憚のないご意見・ご提案を賜りますようお願いいたしますとともに、今後とも、本県のイメージアップや情報発信などへの一層のお力添えと、「みちのく夢プラザ」のご愛顧を賜りますようお願い申し上げます、挨拶といたします。

### 【人幸増加大作戦（「経済を回す」ための取組について）】

※企画政策部長が、資料に基づき県の取組状況を説明

#### （知事）

「経済を回す」をテーマとして話をさせていただきましたが、単に「金を集めて、良くしよう」という意味ではありませんで、仕事をいろいろ作っていくためにも、経済が必要という話です。

それまで4～5件しかなかった起業・創業の件数が110件に伸び、新規就農は年間コンスタントに250名ぐらい、この5年で1,400名ぐらいが帰ってきてくれました。

こうした様々な働き方が可能になるためにも、青森に一定の経済が集まって、コーヒーのロースターとか、ネイルアートとか、眉毛のカットとか、そういう、昔なら青森では絶対に食えないはずだったんですが、そういう技術を身に付けた人が帰ってきて、商売が成り立つようになったのです。

今までだったら、仕事の関係で、大都会でなければ選べなかった自分の人生を、チャレンジできるというのでしょうか。経済が回ることで、職業の多様性と、生き方・人生の多様性を選べる青森にしたいと、そういう思いでございます。

ややもすれば、経済うんぬんっていうと、福祉切り捨てかって以前は言われましたが、「保健・医療・福祉包括ケアシステム」を、国に先駆けて、町長だった頃から20数年、県としても15年間やっておりますので、そういった地道な取組により、我が県では健康の課題があっても、よりよく生きられるという仕組みづくりを、経済の部分から、あるいは命を守る部分から、進めています。要するにちゃんと食える青森であって、なおかつ誰も死なせないという体制づくりを進めてきたわけです。その一環として、一番足りなかった経済を一生懸命集めよう、そういう話でございます。

アジアの経済が九州、特にこの福岡に集まってきて、様々な活動が行われています。そういった姿を見させていただき、我々青森も「やっぱり経済だ」ということ、その決意をお話させていただいた次第です。

それでは、ぜひ意見交換をお願いいたします。

## (司会)

意見交換に入らせていただきます。

それでは、長根様、ご発言をよろしくお願いいたします。

## (長根寿陽氏)

今日はどうもありがとうございます。感じたことをお話させていただければと思います。

ポピュレーション（人口）の増加が県の課題であるということをお聞きしたわけですが、福岡に住んでいて、たまに帰省した時に、どこが違うのかなと比較すると、私もやっぱり人口だと。福岡市は100万人ですが、それで人口が余っているわけではなくて、どこに行っても人が足りない。製造業にしても、農業にしても、どこに行っても、今、人が足りなくてというのは、福岡でも聞かれること。青森のような地方に限らず、こういった大都市でも、人不足は例外なくあるということなんです。

その中で、福岡や東京のようなところと、青森県の違いはどこかということですが、コンビニに行かれると分かると思うんです。福岡市内の繁華街のコンビニにいるのは、半分ぐらいが外国人です。特にベトナムとかインドネシアの方が多く、コンビニには専門に教育する部署があって、ベトナム語、インドネシア語のマニュアルも徹底しているということですね。今、サービス業を支えているのは外国人。農業に関しても事業実習生が多く、「あまおう」とか作っているのも実習生がすごく多いと見受けられるところがございます。青森でも農業では多いのかもしれないんですが、サービス業などで、これだけ外国人がいるのは、なかなかないんじゃないのかなと思っています。



そういった意味で、福岡は特区の中で外国人を活用していこうとしており、外国人の滞在を長くしようとか、ビザをもう少し緩くしていこうという取組を一生懸命されています。それは、製造業に対しては、非常にありがたいことです。九州の各県が合同で特区申請をして、留学生の就労時間を規定の28時間から36時間へ、1週間で8時間増やすことを申請しているということなんです。人が足りないところへ日本人をポンと増やすことはなかなかできないので、九州では、産業の不足部分で積極的に取り組んでいます。情報としてお話できるとしたら、青森でも特区とは言いませんが、何かそういった形を政策の一つとして取り入れてみるのが大切なんじゃないかなと思っています。

ちょっと文献を読んでいたら、青森県に住んでいる外国人の数は全国47番目、都道府県の中で一番少ないというデータがあったんです。外国人がたくさん住んでいるから良いということではないのですが、例えば、外に物を売っていこうとする中で、外国人の嗜好を分からずに売っても、見当違いなことがあります。パッケージの色一つにしても、中国やベトナムじゃ全く違います。そういった部分で、外国人が近くにいることで、どの国ではこういったものが良いんだろうと、感覚的に受け取ることができます。海外の情報を積極的に取り入れるため、「出て行く」のではなくて、「迎え入れる」ことでも、好きになってもらえますし、生の情報を取り入れられるんじゃないかと思います。そういう意味で、九州各県で行われている取組を、施策の一つとして取り組んでみられたらどうかなと感じます。

もう1点が健康面です。私は仕事柄、機能的農産物だったり、健康食品を扱っています。青森県と言うと、不健康県ナンバー1という評価が、ずっとあります。そういった状況の中、青森県がどれほど体に良いものを出しても、「だって不健康県じゃん」って言われてしまうと元も子もないと。例えば、「プロテオグリカンを使い始めたら、健康寿命が伸びました」って言ったら、全国で使うと思うんです。相変わらず、ずっと最下位を走っていると、なかなか説得力が出てきません。でも思ったのは、最下位は決して施策の一つとしては悪いことではなく、もう最下位というのは上げるしかないわけなので、例えば、青森県が来年30番ぐらいポンと上がっていくと、どんなことをしたんだろうと、他の県の皆さんはすごく興味を持たれると思うんですね。そういった健康的な施策やソフト面で、実際に数値を上げていくということが、すごいアピールポイントになるんじゃないかなと思います。長野で健康長寿の要因の一つがキノコにあるという、その産地のものが売れることになりまますので、ソフト的な部分で、健康効果をアピールできる数字を上げていくような施策を打ち出して、今の最下位から上げていくことが、プラスのメリットとなる一つの方向じゃないかなと思います。

### (知事)

率直にありがとうございます。

福岡でコンビニに行ったら、お客様も海外の方が多かったんですが、販売している方々がここまで進んでいるんだなと感じました。そうすると、まだ青森県では、訛っているというところですが、ちゃんと津軽弁とか南部弁の人たちがアルバイトとかでいると感じるところです。

私共、農業分野では、比較的早い時期からいろんな段取りをしており、長期で研修に入れないような国の要件があったんですが、それを通年で入られるように変更していただいたりとか、そんなことを進めています。

昔、私が町長をやっていた時、大手食肉加工業者が非常に元気だったので、町にブラジルからものすごく人が来まして、子どもたちも連れて来ているので、小学校にポルトガル語を話せる先生を置いたぐらい増えたことがあったんです。本国の方が景気が良くなったら、やっぱりスーッといなくなって、というようなこともありました。

あと、うちにはアメリカの方がたくさんいるんですが、ほとんどが米軍関係ですから、カウントに入っていないと思うんです。そういう方々が経済交流をいろいろしてくれていたのですが、ドルが全体的に弱くなって、基地の外に出てきてくれなくて、非常に苦しんだりしております。

福祉関係が非常に大事だろうということでは、実は福祉事業をやっている方が、インドネシアやベトナムの方々を教育するシステムを結構早い時期から進めておりまして、政府に対しても規制を緩めて欲しいと段取りを進めています。

健康づくりにつきましては、私も最前線で取り組んできたんです。少なくとも男性は、非常に良くなってきました。私共の不健康短命状態というのは、40代、50代でバタバタっていく状況だったのですが、40代がすごく改善しました。長野県と沖縄県と私共で「長寿県サミット」ってやっているんです、笑わないでください、長寿になりたいという意味で。長野はいろいろと教えてくれるんです。その中で、長野も飲むし、吸うし、しょっぱいしで、青森と決定的に違うのは、野菜の1日の摂取量が百何十グラムか違うと。それで、この3年間、だしを使い、なおかつ野菜を食べよう私自身がPRしました。そして、スーパーでは、すぐ買い物をしないで、一回り見て歩いてから、それから買い物をしようというようなことをやりましたら、野菜が50g増えました。まだ足りないんです、最低でも100g増やさな

きやいけないんですけども。さらに、運動歩数が平均で300歩増えたとか。意外と変わるもんだなということ等があります。最近、週刊誌にアレコレ書かれたんですが、「今にみている、僕らだって絶対良くなる」ということでございます。プロテオグリカンで、結構歩けるようになった県民は多いです。平均寿命につながるかどうかはともかく、膝とか関節とかに良い。いろんな成分の部分で、PRしていきたいと思っています。

#### （農林水産部長）

ご提案いただきました労働力不足について、現在の取組状況についてご説明します。

農業分野の労働力不足について、いわゆる外国人の技能実習生に対する期待は、これまでも非常に大きく、数値で申し上げますと、農業分野における外国人技能実習生の受入人数は162名で全国15番目になっております。

ところが、ご存知のとおり積雪寒冷地帯ですので、受入先の農家で、実習生の方々が通年で技能実習するという条件には、なかなか恵まれていないこともあり、実習生が2年継続する割合が4割と非常に低くございました。

このため、ご提案にございました国家戦略特区指定などいろいろ検討してきたわけですが、農協中央会などと一緒に、今、整備を進めているところです。こういった面から、多様なニーズに応える体制を整備していきたいと考えております。

#### （新産業創造課職員）

プロテオグリカンの効果をなかなか外に出せないという話があります。というのは、薬事法、今は薬機法ですが、この中で明確に効能を語るができないというのがありまして、そういった中で、何とかして売り出そうと取り組んでおります。大手通販事業者に広告を載せたり、そうした企業を応援するという形で、多くの方に知ってもらおうと取り組んでいます。プロテオグリカンは良いものなので、まず、知っていただくということを進めております。

今、「ロコモティブシンドローム」や「メタボリックシンドローム」「認知症」、これら3つが健康長寿の3大課題と言われておりますが、プロテオグリカンは、こういったことにも効くんじゃないかと弘前大学で研究を進めていまして、ロコモとメタボについては、学術的な評価は固まりつつあります。

あと認知症についても、これはまだまだ夢の世界になるんですが、もしこれが画期的に効くという成果が出ましたら、おっしゃっていただいたように、認知症が直接、健康寿命や長寿には関係しないのですが、プロテオグリカンの良さを外に出していけるのかなと考えております。ですので、そういった形で、何とかプロテオグリカンを売り出そうと、弘前大学や民間企業と連携し合っているというのが、今の取組でございます。

#### （がん・生活習慣病対策課職員）

がん・生活習慣病対策課は、知事が平均寿命を伸ばし、健やかで生きていこうという想いで設立したのだらうと思います。この課ができて7年目になります。

喫煙率等につきましては、いろいろと取り組んで参りましたが、県民の意識とか、しょっぱい、辛いものを好むという習慣を変えていくということは、なかなか大変だと思っております。でも、地道に進めることは非常に大切だと思っております。知事と私で4年ぐらい、かくし芸大会とかスーパーマーケットとかに出向き、「だし活」の皆さんと一緒に、減塩のことなどに取り組んで参りました。知事が行く所に人が集まりますので、そういうことを積み

重ねていくことは、非常に大事だと思っております。

また、今年度から、40代、50代の働き盛りの方々を対象とすると、職域に入っていかなければいけないということで、健康経営、優良企業、事業所の認定制度をスタートさせております。既に経産省でも取組がありますが、青森県の独自のものとして、受動喫煙対策、施設内禁煙を必須要件としており、がん検診を休まずに受けられる環境整備を必須の要件としております。今のところ、建設業者の方々が非常に積極的です。実は入札時の評価ポイントに5点ほどいただいておりますので、56社となっております。私たち健康福祉部だけではできない部分を地域整備部とか、農林水産部の「だし活」の皆さんと組むことで、少しずつですが、意識を変え、環境を変えていっています。なかなか難しいですが、「これから伸びるだけ」と思って頑張りたいと思っております。

ご提案、どうもありがとうございました。

#### (知事)

伸びるだけですから、これからは。

#### (司会)

それでは、次に入りたいと思います。

百合野様、ご発言をよろしくお願いいたします。

#### (百合野博氏)

北九州市で野菜、果物の卸をしております。

今日のテーマは人口減少です。福岡市はちょっと別格ということで、北九州市も含めた地方都市、青森県の各都市もそうだと思いますが、地方都市が抱える基本的な課題であると思っております。自然増が減り、外に出ていく人もまだまだいるということが課題だということです。私の生活している北九州市は、政令指定都市で100万人というのが一つのうたい文句だったんですよ。去年は95万人になったということで、急速に減少しております。人口減少率、減少数が全国で一番多い都市なんです。外に出て行く人ももちろん多いんですが、お亡くなりになる方も多く、産まれる子どもさんが少ないということだと思っております。

元々、北九州市は製鉄会社のお膝元で、工場があって、そこで働く人がたくさんおられて、段々定年退職をして、年配になっていくという、ある意味「老人の街」、高齢化率も高いんです。でも、いろんな調査があると「年寄りが住みやすい街、全国一」です。都市の中に大きな病院があって、心臓が痛くなったらここ、頭が痛くなったらここ、がんになればここという大きな病院が、市内にたくさんございます。老人ホームというか、いろんな形のケアをする施設もたくさんあり、当然、そういう産業のニーズがありますから、健康に対しての取組もしっかりしている。なおかつ、小さい街ですから、お年を召した方が都心のタワーマンションに移り住んでおり、歩いてデパートに買い物に行く、病院に行くというようなことで、人口は減っていますが、定年退職した人が住みやすい街として生きていこうとしています。

産業面でも、大きなメーカーの本社がありますし、自動車会社の工場がすぐそばにあります。ロボットを使って人減らしをする会社もありますが、結局、人がいなくても工場が回っていけると同じように、北九州の産業が発展をすればするほど、人口が減っていくという形になっています。それはそれで、受け入れていくことになっています。

定年退職した人がたくさんいる街ということですが、ここで青森に話を変えますと、青森は一次産業、農業、水産業ですから、定年退職のないお仕事に就かれています。新たに就農さ

れる方も、一生、仕事をする事ができます。私共、りんごやながいも、にんにくを販売させていただいておりますが、日本中で生産者が高齢化して、どんどん、どんどん減っていく。産地に行って、生産者の皆さんにお話をする時、特に高齢者が多いところでは、「皆さん、一日でも長く、元気で頑張ってください。一日でも長く、野菜や果物を作っていただいて、日本人の食べる物を供給してください。頑張ってくださいね。」と話をします。

一次産業に就かれている方は、自分自身の健康のためにも、高い意識を持って野菜、果物を作っておられると思っています。当然、長くやれば技術がどんどん高まっていきますので、その高まった技術を若い方に伝えていくことができると思っています。りんごの剪定技術に関していうと日本一ですし、これを使えば世界中どこへ行っても使えるという素晴らしい技術を持っておられますので、技術を活かしたものを生産していただくことが大事ですし、青森県の基幹産業として、見守っていただきたい。そこで、今度は行政や産業界が、それを販売しPRする活動をしていく循環が必要じゃないかと思っています。海外に向けても、知事がどんどん行っておられますし、そういった活動で基幹産業を守っていく、また、大きくしていくことが必要だと思っています。今日も知事自ら、北九州市内の小学校で、りんごの食育を行っていただいております。「りんごを食べたことがない人はいますか？」って聞いて欲しかったんです。多分、何人かはいるはずですよ。それと、「今年、食べましたか？」というと、やっぱり3分の1は、多分、食べていないと思います。それが現実ですから、そこに対して食育をしていく。我々もそういう教育をしていくことで、青森県の産業を守っていく、生活される方を守っていくことができるのではないかと思っています。また、生産される方には、一日でも長く作っていただきたいと思っています。



また、折角の機会ですから、野菜・果物について言うと、機能性、先ほど話がありました、「りんごを食べるとこんなに健康になるんです」「食べ過ぎはよくないけれど、1～2個にしておけばいい」「それは、こういうふうの良いんですよ」ということを我々がはっきりPRできるよう、整理していただけるとありがたいですし、さくらんぼのジュノハートも、大きなさくらんぼということで大いに期待しています。そういう新品種の開発をどんどん進めたいと思います。

その先例として、私は桃に取り組まななきやいけないと考えています。温暖化して、適地が九州では対処できないですし、和歌山、山梨もでき難くなっている。青森が適地ということで、知事にもいろいろお骨折りいただいた結果、生産が少し増えた。でも、まだまだ生産者が増えるというところまでいっていませんので、ここをもうひと押ししていただければと提案をさせていただきたいと思います。

#### (知事)

ありがとうございます。

実は、北九州の小学校、全部を回って歩くことを目指しておりまして、今日は小倉の南の方に行って来ました。

29歳以下の方々では、りんごを年間800gだったかな、そのくらいしか食べない。高齢者の方は、箱単位、何キロ単位で食べてくれているということがございまして、そういった中で、りんごの機能性、どう健康にいいかということや、何よりもおいしいということ伝えていく必要があります。いくらなんでも800gっていったら、3個いくかどうかです。小さいものだったら4個というのが、これが年間でございます。そういうぐらい追い込まれていまして、だから自分自身、沖縄でも授業をやりまして、金沢でも新潟でも、関西全部、首都圏でもやりましてということで、食育にかこつけて、フルーツ全体のPRを、みかんも柿も食べて欲しいのですよ、一緒に食べて家族団らんして欲しいというのが本音でございます。昔であれば、家族団らん、晩ご飯の後、皆でみかんや柿の皮をむき、もちろん、うちのりんごも、ということがあったのですが、そういった時代をもう1回取り戻したい。会場には子どもたち、それからお母さん方が来てくれますから、そういった方々をファンにしようと、進めさせていただいております。

百合野様には、ご協力いただき、本当にありがたく思っています。

「攻めの農林水産業」も、かれこれ15年進めてきたんですが、先ほど、経済の話もいたしました。自分自身では、「ゆりかごを守りたい」という、ものすごく熱い、強い想いがあります。ゆりかごとは何か。農山漁村集落、本村（もとむら）って言うんですが、田舎には本集落というのがあります。

そこで命を育んできましたし、食べ物も作ってきました。お祭りが、神社があって、文化もある。農山漁村集落は、食と命と文化のゆりかごである。この農山漁村集落を絶対守りたい、そういう気持ちでございます。

今、農村地帯では、人が足りなくなっています。そこで「地域経営」と言って、グループ組ませて畑作、特に米がそうなんですが、米とか畑作とかにグループで取り組んでいます。

一方、漁村というのは、実は非常に良い、便利でありまして、要するに魚がいるところに住んでいるんですね。そこに可能な限り、漁港とか船溜まりとかを小さくても作って、そうすると磯根漁法っていうんですが、年をとっても、海に出れなくても、コンブを獲ったり、アワビを獲ったりできるんですね。漁村の場合、子育てから高齢者を見るところまで、一体的にやれるんですね。そういった意味で、何でこんなに船溜まりとか漁港を作っているんですかって聞かれ、それはもう強い目的があつてだと、水産庁とやり取りをしたこともありますし、報道機関から、余分な事業ではないかって言われても、違うんですよ。皆さん、拠点漁港を作り、そこに車で集まって、船を出せばいいって言います。でも地先に着くには時間がかかるし、行ったり来たりしていると、お年寄りや子どもをみれないですよ。そういった想いで作ってきたんですよ。

生涯現役、倒れるまで元気でやれる。働いていると、頑張れますし、認知症の程度もすごく減りますし、という気持ちで、今後もゆりかごを守りたい、農山漁村集落を絶対残したい、だから、「攻めの農林水産業」に取り組み、経済を集めるシステムも作る、ということも今後進めていきたいと思っています。

ただ、今、百合野さんから話いただいて「あっ、そうだ」と思ったのは、これまで「水、土、人」を農林水産業の基本にしてきたんですが、「健康」も重要だなと。これからは「水、土、人、健康」、それが農山漁村集落の新しいやり方だと。こんなことを進めたいと思っています。



#### (農林水産部長)

まず、百合野様には、非常にご尽力いただきまして、本当に心から感謝申し上げます。食育活動、そこからりんごの販売を盛り上げていこうということを、引き続きよろしく願います。

青森県の特徴は、やはり北海道に次いで高齢化率が低い、若い人が多いということで、これは結局、まだまだ農業のお年寄りの人たちが、力のある状態ということだと思います。

一方、新規就農者が毎年250人以上増えてきているということでいけば、年配の人たちが持っている技術をどういうふうに、きちんと若い人たちに継承していくかという、そういうシステムづくりが非常に重要になってくるのだらうと思っております。

そういったことで、今までも取り組んできましたのが、まず営農大学校などで希望者にきちんとした教育をし、その中から自分でこういうものを目指したいという若手トップランナーの芽を伸ばしてやるということを継続しながら、技術を継承し、そして地域とともに、そういった人たちを育てていく環境づくりが重要だと思っております。我々としましては、農業産出額が3千億円以上を続けている今だからこそ、力を入れて労働力不足に対して立ち向かっていきたいと考えております。

何かとご協力をお願いすることがあると思っておりますので、よろしくお願いいたします。

#### (知事)

よろしくお願いいたします。

あと、赤ちゃんも農業社会では増えています。

3人とか、この間はビックリ4人とかですね。農業地帯ですから、お父さん、お母さんが傍にいてくれるんでということですし。

#### (司会)

それでは、次に甲地様、よろしくお願いいたします。

#### (甲地史昌氏)

ちょっと県人会の状況をお話させていただきます。私共は小さな団体ですが、活動としては、何といても太宰府天満宮の青森県フェアでございます。今日、ご出席の野村さんのお力が非常に大きいところです。後ほど、野村さんからお話いただけたと思います。

今回のテーマ、「人幸増大大作戦」について、少し申し上げたいと思います。

まず、青森県が「人幸増大大作戦」と銘打って、人口減少対策、経済を回すための取組を最優先課題として取り組もうという姿勢、これは大いに賛同するものです。いろんな地方自治体がありますが、どこも必死です。そして、やはり、私が関わりを持つ地方都市でも危機感とは相当なもので、いろんな課題について検討していますが、なかなか救世主となり得るものが見いだせないのが現状だらうと思っております。

それで、青森県が打ち出した「人幸増大大作戦」を実りあるものにするためには、何が一番かと考えました。人口減少対策として、とりわけ先ほどもお話に出ましたように、労働人口の確保は、絶対に避けては通れないと思います。少し調べてみました。日本創生会議人口減少問題検討分科会が2014年に公表した将来統計では、日本の労働力人口は、今後十数年で1千万近く減少するだらうと見込まれているということです。また、2040年には、自治体の半数896が消滅危機可能性があるということを打ち出しています。その中で県庁所在地であります青森市や秋田市までが消滅の対象とされていると。ご存知だらうと思

いますけども。都道府県単位をみますと、秋田県が35.6%、次いで青森県が32.1%という、ちょっと私も調べて、ショッキングな数字が出ております。

そういう現状を鑑みて、知事が率先して、あらゆる方面に方策を検討されているということは十分承知をしておりますが、当面、優先すべき課題は、人口減少をいかに食い止めるか。労働人口の確保、経済再生、それをどのような形でさらに進めていくのか。その解決策の一つは、出生率を上げる政策にあるのではないかと思います。

青森の移住・定住ガイドブックを見せていただきました。各地方、市町村、それぞれが打ち出しをしております。第1子から第3子、それ以上も含めて、青森で生まれて良かったとパンフレットにあります。それを感じさせるには、もう少し手厚い保護が必要ではないかと思っています。

定住ガイドブックには、子育て世代の支援とあります。それから、定住新築住宅の建設の補助金があり、移住・定住応援もあります。しかし、やっぱりこの県はいいんだと思わせるものを、もう少し続けてもらえればいいと思います。そのためには、先ほどから知事以下、皆さんがお話されている、経済を回す取組を、さらに推し進めていただければと感じます。



第2に、青森の自然、風土、文化含めて、私は本当に優れていると、声を大にして言えると思うんです。福岡に住んでいると、なかなか青森の話は伝わって来にくい、これはやむを得ないと思いますが、第二の故郷を、どこでもやっていますが、やっぱりこれをもっともっと力強く出していければいいなと思っています。第二の故郷大作戦と申しますか、そういうものが一体となってやっていければいいと思います。というのは、私の出身校は野辺地高校なんです。この前、同窓会がありました。もう終活に入っているんですよ、70過ぎると。あれどうしよう、これどうしよう、健康がどうだと言っていますけどね。最後に皆さんが言ったのは、課題を先延ばしして、次の世代に残すわけにはいかない。私たちでも何かできるものはないのか、できるものはあるはずだと。お金の問題じゃないということだったんです。ただ、糸口がなかなか掴めない。いろんなところで少しでも参画できて、それを活用して余生を過ごすことで、青森で良かったなと思える人が結構いると思います。そうした人をどんどん活用していただきたい。お金を払って活動してもらうのではなく、自らそう意思を持って活動する人たちはいっぱいいますから、第二の故郷でもいいですし、いろんな部分で活動できる組織を作り上げていければいいなと思っています。

テーマが本当に大きすぎて、よくぞこのテーマを真正面からとも思いますが、ネーミングが素晴らしくて、深刻なテーマをこの部分でフツと思いつきながら、でも、やらなきゃいけないなという思いにさせるんです。そこから次の行動に移る糸口を何とか作っていければいいなと思います。

経済の話が中心でしたが、経済以外にも我々がこういうものを打ち出して実現をするために、もう一つお考えのものがあれば、お聞かせください。

頑張りましょう、知事。

## (知事)

ありがとうございます。いろいろと元気が出てきました。

一つだけ。お笑いではないんですけど、一昨年の赤ちゃんの増えた数、青森県が日本一だったんですよ。これは凄いですよ。私、「すげえな、何人増えた？」って聞いたら、日本一なんですけど「5人増えた」って。冗談かって言ったら、2番がマイナス50とか、皆マイナスなんですよ。とりあえず増えたというので、皆で「まあいいか、増えたんだから」という話はしたんですけど。それだけ日本全体が、深刻に赤ちゃんが増えない。その前の年より増えるか、減り方が少なければいいんですけど。ところが去年は劇的に減って、「何でよ？」って言ったら、「そんな、年子で産まないですから」って言われて、あっそうかと納得したんですけど。冗談のような面白い話なんですけど、赤ちゃんが増えました日本で一番、5人。というようなことなどを考えてみますと、さっき農村の話をしたんですけど、確かに3人、4人って産んでくれる人たちがいると、頑張れるんだなということを思っています。

もう一つ、弘前大学とか県内の大学と組んでいろいろとやっているんですが、そうした学生を可能な限り「逃がさない」、大学を卒業した後。それから、「取り戻す」。高校を卒業した後、都会に行ってみたいというのが結構多いんですが、帰って来たいというのも多いので、マッチングをやって、今、取り戻す算段をしているんです。とにかく「逃がさない」「取り戻す」ということを一生懸命やっています。

「社会減」対策や「自然増」対策、「社会増」とは言いませんが、「社会減したものを取り戻す対策」と言いますか、これを両面でやっていますが、たいへんです。

## (企画政策部長)

まず、出生率の話がございました。先ほど知事から増えたという話がございましたが、出生率については、確実に上昇しておりまして、平成28年は合計特殊出生率が11年ぶりに全国平均を上回るということで、上昇傾向を示しております。非常に地道な取組でございますが、引き続き仕事と出産、子育ての両立支援、それから女性のキャリア形成の推進、社会全体で子育て世代を応援する機運の醸成などに取り組んでいきたいと思っております。

それから、各市町村でいろんな子育て対策を行うわけでございますが、私共としては、各町村で取り合いになってはいけない、県全体でうまくいくようにしなきゃいけないという難しい問題も抱えておりますので、そういうことも考え合わせながら、今後、取り組んでいきたいと思っております。

次に労働力の確保対策の話がございました。これは、先ほどご紹介しましたように、本県からたくさん若い世代が流出しておりますので、若い世代を少しでも県内に定着させるということで、特に本県の場合には、工業高校生の6割が県外に就職している状況ですので、この工業高校生を中心に、できるだけ県内に就職してもらえるように、いろいろな取組を企業とネットワークを組み合わせながら進めている状況でございます。

それから、もう一つ重点的に取り組んでいるものとしたしましては、親世代への働きかけがでございます。県外へ就職する親御さんと、県内へ就職する親御さんでは、明確に親御さんの意識が違ってきております。県外へ就職する親御さんは、子どもさんにぜひ青森で就職して欲しい、そして、青森で働いても良いことたくさんあるんだよということの働きかけといいますか、意識を常日頃から子どもさんに伝えていることが、アンケート調査から伺えます。

一方、県外に就職される親御さんの場合は、どちらかというと子どもさんに任せる、子どもさんの自由にする。そして、県外へ就職してもいいよという意向を示されている方が多いようにアンケート調査から伺えます。

ただ、県外に就職しても良いという親御さんの中でも、何年かしたら青森県に必ず戻ってきて欲しいという意向を示されている方が、3割とか4割いるわけで、私共としては、この親世代に、青森県には多様な働き方、生き方ができる環境が整えられつつあるということ、地道に、PTAの場とかに県職員が外向きまして、いろんな資料を示しながら、布教活動といたしますか、そういうことも行っているところでございます。

あと、第二の故郷を作るという話がございました。これについては、県でも移住定住の取組をいろいろ積極的に進めているところです。東京の有楽町には、「あおもり暮らしサポートセンター」という移住就職相談窓口も設けており、段々と相談件数も増えてきております。そのほか、様々な青森県のネットワークが各地域にございますので、このネットワークの形成に努めるとともに、ネットワークを活用して、青森県に移住した方々との交流会を開いていただくなどの取組なども積極的に進めております。

さらに、いろんなターゲットに応じて、青森県の良さを雑誌などでPRする情報発信も進めております。最終的には市町村に移住するわけですので、県内40市町村のバラバラな取組では、うまく情報が伝わりません。県としては、いろいろな生活の場面を考え、できれば圏域単位で、青森を中心とした東青地域、下北なら下北地域という圏域単位で、移住の取組をお願いする取組を進めているところでございます。

いずれにいたしましても、この「自然増」対策、そして「社会増」対策は、地道な取組でございしますが、先ほどご紹介申し上げましたように、「社会減」は「下げ止まり」を示しておりますので、引き続き一生懸命取り組んで参りたいと思います。御協力のほどよろしく願いいたします。

#### **(がん・生活習慣病対策課職員)**

私が、保健師として見たところでは、やはり安心して産んで育てることのできる環境がとても大事で、青森、八戸、弘前のように医療機関もあって安心してというところと、その他の地域では違います。お母さん方も不安なだけけど、子どもを預けることもなかなかできない。そうじゃなくて、お爺ちゃんやお婆ちゃんと一緒に育てていくような環境が、青森県には必要なんじゃないかなと思っております。いろんなことを市町村も考えておりますが、そういう環境を作っていくことが、とても大事だと考えております。不安なところは保健師が相談に乗りながら、助産師さんと一緒に訪問などもして、今後も知事の施策に頑張っていきたいと思っております。

#### **(知事)**

やっぱり、包括ケアを一生懸命している農村地帯では、子どもの数が3人、4人ということがあるんですよ。保健師さんの力って、すごく大きいと思っております。

#### **(司会)**

では、続きまして野村様、よろしく願いいたします。

#### **(野村木乃実氏)**

天満宮というか、太宰府全体が観光の街として、年間で約1千万人の方がお越しになっており、その中の何割かが外国の方、特に中国のクルーズ船がたくさん来ております。倍、倍、倍と増えてまして、今、四百何十隻、来ているんじゃないでしょうか。昨日も雪の中、中国からたくさん来られました。当初はすごく経済的なもので、「爆買い」にいられていました中国の

方も、本土での持込みが厳しくなり「爆買い」は減ったみたいで、これからは純粋に観光に目を向けていただけるのではないかなと期待しています。でも、観光地では、あまりお金を落とさない、落とされるのはゴミだけというところが多く、また、文化の違いとかありまして、たくさんの方に来ていただけるのはありがたいことなんですが、来られるにあたっての文化のレクチャーをしないと向こうの方も分からない、ただ来て「良かったね」って帰るだけじゃ、来られた方にもちょっと失礼じゃないかということで、日本はこういうところなんだよ、今日、来られたところはこういうところなんだよというレクチャーをして、ちゃんと日本を感じてもらうのが大切なことじゃないかなと思っています。中国の方は、日本中、いろんなところに行かれると思いますが、受け入れる側が、そういったことを思いながら対応された方がよろしいと思います。

太宰府天満宮と青森との交流は今年で20年ということで、昨年11月にりんごの使節にお越しいただきまして、20周年の記念行事を終えました。また、今月の21日から青森にお邪魔いたしまして、各所を回るつもりでございます。私も、この青森のりんごの使節に関わらなければ、多分、青森をここまで感じることはなかったでしょうし、こういう交流というものを地道に重ねることで、知っていただく、広報に繋がる。伝えることって難しいもので、伝える者に労力がかかるものでございまして、こういった地道なことを今後ずっと続けて、皆さんに知っていただきたいと思っております。



先ほどの甲地会長からお話がございましたように、うちの行事の中に、青森を深くたくさん知っていただくという青森フェアがございまして、この期間中、10月には1か月、楼門の上に応援隊の三上さんにお作りいただきましたねぶたを掲げました。そして、応援隊の磐田先生に津軽三味線の演奏、そして情報プラザには、りんごも美味しい、でもりんごだけじゃないんだよ、ホタテもあるよ、嶽きみがあるよと、地道な活動を行っております。また、県人会の方に大変精力的にご協力というか、来ていただきまして、大変盛り上がっております。知事のように青森の方は皆さん、活発な方が多いのかなと感じている次第でございます。

20周年を契機に30年、40年と続けていきたいと思っております。この交流をするにあたりまして、やはり知っていただくというのが大切。私もそうですけども、地元でずっといると、地元のことでなかなか分からないんですね。地元を出ることによって、福岡っていいところなんだな。あるいは、他に行くと、いいところなんだなと。やはり、外に、いろんなところに出ていくというのは大切なことだと思います。

それと、一番大切なのは、やはり簡単に行ける交通手段が欲しい。これは、やはり一番のネックじゃないかなと私は思っております。願ってもなかなかできるものではありませんが、今、福岡空港が工事を行っております。滑走路がもう1つ増えるということで、多分、2024年ですかね、出来上がるのではないかな。この時をチャンスに、直行便の取組を進めていただければ幸いかなと思っております。

(知事)

ありがとうございます。

青森に一番最初に春を告げてくださるのが、野村様と巫女さんたちでございまして、紅白の香りがダーッと来るんですね。「おー今年も、もうちょっとで、春が来るな」って、そう思います。20年を迎えることができました、感謝いたします。

**(野村氏)**

もう1つ、太宰府の名物で「梅ヶ枝餅」というのがございまして、道真公が一番最初にお食べになったという由緒のまんじゅうでございしますが、今回は20周年の記念ということで、この梅ヶ枝餅を現地で焼いて、皆さんにお出ししたいと思っておりますので、ぜひ、よろしくお願い致します。

**(知事)**

感激です。

天満宮に行って、お参りするの当然ですが、その後、梅ヶ枝餅を食べるというのは一つの文化でございます。ともあれ、20周年、本当にありがとうございます。

そして、青森フェアという形で、1千万人もおいでいただいている太宰府天満宮様で、いろんな方々が青森のことを知っていただくことにご協力いただいていること、本当に心から感謝します。お互いに交流することの大切さということをお話いただきましたが、全く私もそう思います。

だからこそ、直行便ということでかなり攻めまくったんですが、空きがない、スポットですか、ああいうものに枠がないんだということで、我々としてもテーマですね。ぜひ、航空会社に強く要求というか、アピールしていきたいと思っています。

農林水産部から感謝の想いを。

**(農林水産部長)**

本当に感謝を申し上げるだけでございます。

いろんなイベントを見させていただきますと、それこそりんごだけでなく、ホタテだとか、嶽きみだとか。我々、モノには自信があるんですが、こういう舞台に立たせてもらわないと評価いただけないものですから。こういう大都市で、しかもこんなに、海外も含め年間1千万ぐらい来るといふ舞台で、こういったものをお出しいただけるというのは非常にありがたいと思っております。ぜひ、我々も続けていきたいと思っておりますので、より一層の取組をよろしくお願い致します。

**(三村知事)**

よろしくお願い致します。

**(司会)**

それでは、ここで終了させていただきます。

どうもありがとうございました。